

徒然の記 その六

灯火(ともしび)

灯火とは、「ともした明かり」のことです。「とうか」とか「ともし」とも言います。「ともしび」と言うと、ゆらめく火影がイメージされ、燈芯皿の中で静かに燃える燈明がぴったりのような気がします。

ろうそくの火も、ともした明かりです。

焚き火の明かりとか松明(たいまつ)やかがり火も、ともした明かりの仲間と言えるでしょう。

「とうか」となりますと、燃える火の明かりよりも、電気の光のイメージが強くなります。

同じ電気の光でも、小さな裸電球のほの暗い光は、ともしびと呼んでも抵抗を感じませんが、目も眩い繁華街のイルミネーションなどは、誰もともしびとは呼ばないでしょう。

灯台から放射される光芒(こうぼう)は、近くで見れば、とうかですが、沖を行く船からは遠くに瞬(またた)くともしびのように見えるでしょう。